

中国青年の死生観と祭祀

—— アンケート調査の結果より ——

黄 當 時

1. はじめに

「日・韓・中における社会意識の比較調査」研究班は、昨年の発足以来、隔週に定例の研究会を開くとともに、アンケート調査の質問項目を設計してきたが、今年4月から6月にかけて、三カ国同時に、青年にアンケート調査を実施した¹⁾。調査結果の単純集計ができたので、その一部を紹介し、今夏、中国河南省で行われたヒアリングを取り上げて、農村青年の意識を伺う。さらに過去における中国の祭祀を顧みつつ、今日の北京において人々はどのように墓の問題を見ているのか、を紹介する。

2. アンケート調査のデータ²⁾

先ず、死生観に関する三国のデータを見ておきたい。

「あなたは、以下のことから信じているものがありますか。次の中からいくつでも選んでください」と聞かれた日・韓・中三国の青年の答えは、それぞれ、

1. 神あるいは仏の存在

〈日本・京都：19.6%，日本・大阪理系：13.7%，韓国・大邱：41.4%，韓国・全州：33.7%，中国・農村青年：7.2%，中国・職業青年：9.8%，中国・大学生：8.2%〉、

1) 調査は、日中両国では4月から6月にかけて、韓国では5月に行われた。なお、中国でのプレ調査は、1998年9月2日から7日にかけて北京で、12月26日から30日にかけて上海で行われている。

2) 日本・京都、日本・大阪理系、韓国・大邱、韓国・全州は、大東氏のデータを、中国・農村青年、中国・職業青年、中国・大学生は、呉氏のデータを使用した。クリーニング未済である。

2. 聖書あるいは経典などの教え

〈日本・京都：6.1%，日本・大阪理系：4.1%，韓国・大邱：33.4%，韓国・全州：35.0%，中国・農村青年：10.4%，中国・職業青年：13.3%，中国・大学生：13.2%〉，

3. あの世，来世

〈日本・京都：16.9%，日本・大阪理系：15.7%，韓国・大邱：45.2%，韓国・全州：35.7%，中国・農村青年：4.6%，中国・職業青年：11.1%，中国・大学生：12.5%〉，

4. 奇跡

〈日本・京都：44.2%，日本・大阪理系：56.9%，韓国・大邱：43.2%，韓国・全州：29.4%，中国・農村青年：48.9%，中国・職業青年：49.7%，中国・大学生：63.9%〉，

5. お守り・おふだなどの力

〈日本・京都：18.3%，日本・大阪理系：15.7%，韓国・大邱：3.8%，韓国・全州：3.3%，中国・農村青年：6.2%，中国・職業青年：7.1%，中国・大学生：8.1%〉，

6. 易や占い

〈日本・京都：12.5%，日本・大阪理系：16.8%，韓国・大邱：15.4%，韓国・全州：11.6%，中国・農村青年：6.0%，中国・職業青年：12.0%，中国・大学生：9.5%〉，

7. その他

〈日本・京都：12.4%，日本・大阪理系：11.7%，韓国・大邱：9.9%，韓国・全州：11.9%，中国・農村青年：35.9%，中国・職業青年：18.8%，中国・大学生：28.9%〉，

8. 信じているものはない

〈日本・京都：27.3%，日本・大阪理系：22.3%，韓国・大邱：16.0%，韓国・全州：24.5%，中国・農村青年：—，中国・職業青年：—，中国・大学生：—〉，

9. [質問文の意味がわからない]

〈日本・京都：1.0%，日本・大阪理系：0.5%，韓国・大邱：0.0，韓国・全州：0.8%，中国・農村青年：4.8%，中国・職業青年：14.9%，中国・大学生：2.9%〉，であった。

「神あるいは仏の存在」を信じる比率は，三国の中で，中国青年が最も低いのに，「聖書あるいは経典などの教え」を信じる比率は，中国青年が日本の青年をうわまっで，中間にある。字に書かれたものの方が中国青年にはインパクトがあるのであろうか。「あの世，来世」を信じる比率は，中国青年が最も低いのに，「奇跡」を信じる比率は，日本・大阪理系を除き，中国青年が最も高い。「お守り・おふだなどの力」を信じる比率は，中国青年が韓国青年をうわまっで，中間にある。「易や占い」を信じる比率は，中国・職業青年が韓国・全州より多いのを除き，中国青年が最も低い。「その他」は，中国青年が最も多いが，どのようなものがあるのか，注目される。「信

じているものはない」については、中国版で選択肢そのものが無いため比較できない。「質問文の意味がわからない」を選んだ比率は、中国青年が最も高い。

次に、「あなたは、人は死んだらどうなると思いますか。一つだけ選んでください」と聞かれた時の答えは、それぞれ、

1. 天国あるいは地獄に行く

〈日本・京都：8.2%，日本・大阪理系：8.0%，韓国・大邱：21.0%，韓国・全州：31.2%，中国・農村青年：1.1%，中国・職業青年：1.1%，中国・大学生：0.7%〉，

2. 極楽あるいは地獄に行く

〈日本・京都：1.5%，日本・大阪理系：2.0%，韓国・大邱：1.7%，韓国・全州：1.3%，中国・農村青年：3.0%，中国・職業青年：2.2%，中国・大学生：1.5%〉，

3. 新しい生命に生まれ変わる

〈日本・京都：27.1%，日本・大阪理系：26.6%，韓国・大邱：30.2%，韓国・全州：22.2%，中国・農村青年：7.2%，中国・職業青年：11.5%，中国・大学生：8.9%〉，

4. 肉体は無くなっても靈魂は残り、子孫を見守っている

〈日本・京都：17.8%，日本・大阪理系：13.6%，韓国・大邱：16.0%，韓国・全州：14.1%，中国・農村青年：10.4%，中国・職業青年：15.3%，中国・大学生：12.2%〉，

5. 肉体は自然の物質にかえり、魂も消える

〈日本・京都：32.8%，日本・大阪理系：35.7%，韓国・大邱：20.1%，韓国・全州：20.6%，中国・農村青年：68.8%，中国・職業青年：57.4%，中国・大学生：61.1%〉，

6. その他

〈日本・京都：10.7%，日本・大阪理系：12.1%，韓国・大邱：10.5%，韓国・全州：8.8%，中国・農村青年：7.0%，中国・職業青年：6.8%，中国・大学生：13.2%〉，

9. [質問文の意味がわからない]

〈日本・京都：1.8%，日本・大阪理系：2.0%，韓国・大邱：0.5%，韓国・全州：1.8%，中国・農村青年：2.6%，中国・職業青年：5.7%，中国・大学生：2.5%〉，であった。

「天国あるいは地獄に行く」と「極楽あるいは地獄に行く」は、宗教の違いを考慮して設計されたもので、聞こうとする内容は同じである。これ(ら)を選んだ比率は、中国青年が最も低い。「新しい生命に生まれ変わる」も同様である。「肉体は無くなっても靈魂は残り、子孫を見守っている」については、大きな違いはない。「肉体は自然の物質にかえり、魂も消える」では、中国青年が圧倒的に高い比率を見せている。この顕著な差異の背景には、国家体制とそれに伴う教育内容と関わりがあるのかも知

れない。これは今後検討すべき問題の一つである。「その他」に、どのようなものがあるのか、興味深い。「質問文の意味がわからない」を選んだ比率は、中国青年が最も高い。

3. 河南省でのヒアリング

新郷市は河南省北部に位置し、南に黄河を望み（新郷地区を流れる黄河の長さは170キロに及ぶ）、省都鄭州まで80キロで、北に太行山があり、首都北京まで600キロで河南省の省轄市の一つである。隋の開皇六年（西暦586年）に新郷県が始めて置かれてより1400年余りの歴史を有し、1948年11月に新郷市人民政府が成立した。現在4区、6県を管轄、2市を代理管轄し、総面積は8169平方キロ、総人口523万である。

今夏のヒアリングは、8月22日午前到新郷県七里営鎮龍泉村、午後に同県の小冀鎮西石碑村、23日午前原陽県福寧集郷の中岳村、午後に同郷の後堤村の四村で行われたが、その状況は、日韓中研究会でのレジュメ（近藤敏夫「河南省鄭州フィールド調査」1999/9/10及び10/15、星明「河南聞取調査テープ」1999/9/10）に詳しい。ここでは、8月22日午後の西石碑村公民館でのヒアリングのうち、死生観に関するやりとりを取り上げておきたい³⁾。

君塚：父親が年をとって亡くなるとしたら、その後はどこへ行くのか。天国か、地獄か、他の生き物になるか、単なる物質になるか、靈魂が見守ってくれるか。

男、女：何も信じない。死んだ後は何もかもなくなる。

君塚：でもお墓に行きますね。

男、女：はい。

君塚：宗族ですから祠堂がある。先祖を守る……

男：ない。

君塚：祠堂が……

村長：この村には二つの宗族がある。王と魏。例えば王の共通の墓がある。四月の清明節に皆その墓に行く。

君塚：その時、お墓の前でどんな気持ちになるのか。

女：死んだ中に親しい人がいれば悲しい。

君塚：どれぐらい先までの祖先をイメージするのか。

男：祖父の父まで。それ以上は関係ない。

この対話だけでは不十分であるが、一応、彼らは、死後に靈魂が存在するとは思っていないが、墓参りには行くことが伺える。故人を偲ぶのはいつでもどこでもできる筈であるが、墓という場を利用した方がよりやりやすいからなのだろうか。

現在の人々の意識は過去と同じものなのだろうか。過去における青年の意識調査というものはないが、過去の祭祀を通して人々の死生観を理解することは、過去と現在の違いを見るのに無益ではなかろう。

4. 過去の祭祀

古代史の記載と伝説によれば、黄帝の頃、死者を哀悼するには心喪・悲痛するだけで良く、儀式としての葬儀はなかった。堯帝の頃に、三年の服喪期間が制定され、周代になって、葬儀の次第が正式に出来上がった。その後、宗法制度の発達や生産力の高まり、封建制の強化に伴って、葬儀はますます重視され、より複雑で煩瑣なものとなった。

伝統的な習慣では、墓を建てるにはまず風水を見なければならない。風水は、一種の地相占いで、宅地や墓の地形・地勢・方向などを見て吉凶を占うのである。

肉体（形魄）と魂気が結合すると人となって、食事をし、服を着、住まい、動き、考え、働く。時が経ち、二者が分離して人が死ぬと、魂は鬼や神となって天に昇る。魄は、肉体であるが、地上に留まるか地下に入る。魂魄は行き先が異なり、人が死んだ後は天に向かって招魂するしかなく、地に向かって招魄することはない。

「招魂」は、『礼記』の「曲礼下」「礼運」「喪大記」篇などに紹介されている。その主な内容は、近臣あるいは親族が死者が生前に着用していた服を持ち、屋根の上などの高いところに上り、死者の名を呼びながら手にした服を振り、死者の靈魂が帰って来るように願う。これを三度行う。終わると下に降りて、服を死者の肉体にかぶせ、「魂」が肉体に戻ってきたとする。

古代の人は、靈魂が肉体を離れて間もないころはちょうど外で徘徊遊蕩し、落ち着き先を求めている、と考えた。肉親がこの時に大声で呼び、懸命に引きとめるなら、靈魂は我に帰り直ちに帰って来る、と考えたのである。肉親の不死を願うことが、「復」儀の思想的な根源であり、靈魂不滅が、「復」儀の理論的な基礎である。「復」とは、「帰れ！」という招魂の呼びかけであるが、招魂儀式の出現は、原始社会であろう。社会が発展すると、招魂の儀式もその様相を変えた。高所に上り、服を振り、

3) この西石碑村でだけ、死生観に関する問答があり、他の村では、言及がない。

大声で死者の名を呼ぶ方法は、急速に、舞いながら歌う形式に取って代わられた。そして儀式の主催者も死者の近臣や親族ではなく、祈禱師に変わった。祈禱師が入ってくると、もともと極めて短く、三回反復すれば良いだけの「復」語を拡充し、新しい招魂詞を作った。民間の招魂詞は、ほとんど残っていないが、文人の招魂詩は少し残っており、舞いながら歌うという招魂の儀式を理解する資料となっている。現存する最も完全な招魂詩は、『楚辞』の「招魂」で、屈原の作と伝えられている⁴⁾。

道場はもともと仏教が齋を設け、亡霊を祭り、済度した法会場で、南朝梁の武帝蕭衍が始めたと伝えられる。仏教が中国で大に行われたので、民間でも、仏教經典にいう人生に六道流転があり、人の死後からもう一度生まれるまでの段階には、「中陰身」が存在するということを信じた（またいうには、極善・極悪の人にだけ「中陰身」がない）。一般の人の「中陰身」は5・6歳の子供のようなもので、素っ裸であり、感覚は鋭敏で、陰間で脱身の間を探し回っており、七日が期限である。もし七日経ってもまだ決まらなければ、もう七日続ける。七つ目の七日になるまでに、転生の場が見つかる。これが「生縁説」の依拠である。仏教經典にまたいう。人が生まれると七日を臘とし、死ねば七日を忌とする。一臘が経てば一魄が形成され、七七四十九日かけて七魄が全部揃う間に、人間もゆっくりと成長する。一忌で一魄が散失し、七七四十九日で七魄が全部逃げ去ると、人もついに死んでしまう。これが「魂魄集散」説の根拠である。つまり、亡くなった人が滅罪昇天したり、良い転生の場を得たり、十八層の地獄に落とされて衝き砕かれたり、焼かれたり、引きずり回されたり、斬られたりなどされないために、親族は僧に道場を作ってもらい、道場の法事を通して亡霊を済度するのである。

霊魂は肉体を離れた後、あの世でもやはりこの世と同じような生活をしていると考えられていた。もし死者の霊魂を長期にわたって外に寄寓させ、困窮流浪させるなら、霊魂は野鬼孤魂となり、苦難を受ける。これは子孫たる者の最大の不孝・不敬である。このようなことになれば祖宗神霊の加護を受けられないのみでなく、世間から白い目で見られ、指をさされる。人々は一生このような悪名を背負いたくないため、どんなことがあっても肉親の遺体を家に運んで帰るのである。

4) この篇の趣旨は、四方のはてにはいろいろと恐ろしい怪物がいて、魂をとって食うから、魂よ早く楚の国に帰れ。そこには宮室・飲食・音楽すべて美しく楽しいものが満ち足りている。早く帰って来るがいい、と遠くへさまようている魂を招き帰すのである。（目加田誠訳『中国古典文学大系15 詩経・楚辞』平凡社1969年）

5. 北京の葬送の現状

1998年6月9日付けの『北京晩報』に馬多思の「百年之後何処去?」と題する記事がある。登場人物は、青年に限られてはいないが、北京の人々の葬送に対する見方や現状を知るのに役立つと思われるので、やや長いが、以下のとおり紹介しておきたい。

北京は大都市であり、市民の総数は一千万を超え、さらに外来の流動人口が数百万を数える。人口がこのような多いと、当然ながら死者も多い。北京埋葬管理処の統計によれば、北京市の年間の自然死亡者は約7万である。

北京は近代都市で、市全体の火葬率は98%に達し、市街地では99%を超え、少数の辺鄙な山地の火葬条件のないところだけが土葬の習俗を残している。火葬率が高いため、ほとんど全ての親族を亡くした家庭は遺骨の処理問題を抱えている。

北京は伝統と近代とが共存している都市でもあり、伝統的な埋葬の習俗を残しているだけでなく、たえず様々な近代的な埋葬方式が出てきている。時代の変遷に伴い、北京の人々の埋葬方式もまたたえず発展し、変化している。では、今の北京の人々は百年後はみなどこに行くのであろうか。

遺骨を納骨堂に安置することは北京の人々の伝統的な方法の一つで、とても良い、便宜上の方法でもある。とても良いというのは、納骨堂の環境が一般に清潔で乾燥しており、遺骨を安置するのに適しているからである。また管理費も廉価で、一年に10～20元である。便宜上の方法というのは、遺骨を納骨堂に安置できるのには期限があるからで、一般に3年位で、期限が来れば、改めて継続安置してもらうか、持ち帰る必要があり、そうしなければ、納骨堂の方で深埋処理をしてしまう。納骨堂の面積も極めて限られており、遺骨は全てびっしりと並んだロッカーに収納され、家族が祭るのにとっても不便なのである。

老山納骨堂で取材したおり、記者は、一人の痩せた若い娘さんが目を赤くして、布切れて両親の骨箱に積もった埃を拭いてから、はしごに上り、重いマホガニーの骨箱を苦勞して持ち上げて、最上層のロッカーに戻そうとしているのを目にした。記者は、彼女が骨箱を戻すのに手を貸したが、彼女が言うには、自分は今外国で働いており、一年に一度だけ両親に会いに戻れる、とのことである。両親の遺骨は安置満期まで後一年だが、その後遺骨を国外に持っていくのか、北京で墓地を買って安置するのかまだ決めていない、とのことである。

「私にはまだ一年考える時間がある」、彼女は骨箱の上に花を置きながら言った。

この娘さんのように、取りあえず肉親の遺骨を納骨堂に安置してからゆっくりと最終方法を考える人は恐らく少数ではないであろう。

肉親が火葬された後、遺骨を直接家に受け入れるのも、一部の北京の人々の伝統的な安置法である。

記者は、柳芳里に住む老婦人于さんの家で骨箱が4つあるのを見た。「この4つの骨箱の中には、両親とお爺さん、お婆さんの遺骨が入っていて、30数年になるものもあるんです。私たちが亡くなった後、子供たちが急にこんなにたくさん遺骨を処理するのはきつととても面倒でしょうね。」于さんは憂いを込めて言った。

「僕は父親の遺骨を枕元の棚に入れているけど、面倒なことは何もない。僕は迷信は信じない。」二階に住む一人者の馬さんは、父親との関係がとても良く、父親が亡くなった後も、遺骨が家を離れるのに忍びないのである。

「いつも家に置いていて、もしも来客に見られたら、どれだけいやだと思われることだろう。お金があるのなら、やはり今はやっているように墓地を買ったほうが良い」と、于さんは自分の考えを補足した。

実際には、遺骨を墓地に安置するのは新しい方法ではなく、伝統的な方法である。以前、古くからいる北京の人々の多くは皆、実家に先祖代々の墓があり、死者が出れば遺骨を実家に持ち帰って埋葬すれば良かったのである。北新橋でレストランの社長をしている李さんは私に、彼女の家は懷柔に先祖代々の墓があるがもう満杯に近く、彼女の代まで来ると、恐らく彼女の分は無いだろう、と言った。私を太子峪墓園まで乗せたタクシーの運転手は、彼女の母親は十数年前に亡くなり、遺骨は河北の実家にある先祖代々の墓に埋葬したが、自分はここ数年ずっと見に行っていない、と言う。

当然ながら、今の北京の人々の多くには先祖代々の墓が無く、80年代以来、経済的にますます豊かになるにつれ、多くの人は2, 3千から4, 5万円の値で霊園に墓地を買い求め遺骨を安置しようと考えている。このような霊園は多くが山の中に建設され、公道から距離があり、農地を占用することもなく、草花や松、柏の木がたくさん植わっていて、環境はとてもすばらしい。

金山霊園では、一組の若夫婦が子供を連れて墓参りに来ており、夫は墓前に花をいけて、しばらく黙禱した後、子供を連れて近くへ散歩に行ったが、妻は墓碑を掃除し終えると、ずっとその前に黙って坐り、何か物思いにふけっているかのようであった。この墓はきっと彼女の両親のものであろうと思ったが、たずねてみると案の定そうであった。彼女は、「ここにはよく来ていて、どんな苦しみ、喜び、失敗あるいは成功であれ、両親に話したいの」と私に言った。

温泉墓園で、知的な老夫婦が外孫を連れて娘の墓参りに来ていた。私は近くにいたが、夫の方が、もうすこし早く娘の病気が見つかったら良かったのに、と嘆くのが聞こえた。妻の方が、どうしてまたこのことでぶつぶつ言うの、娘にこんなことを言うようじゃ孫は育てられないわね、と恨めしそうに言った。孫はまだ幼く、天真爛漫に傍らで虫を捕まえて遊んでいたが、突然顔を挙げて、「お母さんは死んじゃったのね」と言った。これを聞いて老夫婦はまたさめざめと涙を流した。

墓参りが終わってもこの老夫婦はまだ心残りのようで、傍らで他人がどのように肉親を祭るのかを長いこと見ていた。彼らはここどこが気に入っているのだろうか。

「辛いけれど懐かしいという感じですね。」老人は、かすれた声で言った。

多くの有名人も霊園を自分の落着き先としている。例えば、戯曲作家の翁偶虹は天慈墓園に埋葬されており、「西部歌王」王洛賓は金山霊園に埋葬されている。

有名人の霊園はとても奇抜なのが多く、朝陽霊園には、相声大師劉宝瑞の墓があるが、その傍らには石造りの屏風が建っていて、表には前文化部副部長高占祥の題字「笑在人間」が、裏には劉氏の学生馬季の題字「芸高德重」が彫られている。墓は厳かに造られてはいるが、墓碑の劉宝瑞の三文字を見るとどうしても「珍珠翡翠白玉湯」「連昇三級」などの見応えある相声のひとつを思い起こしてしまう。太子峪墓園内にある新中国第一代のアナウンサー費寄平の墓碑はテレビ塔の形をしている。作家鮑昌の墓は素朴すぎてみすばらしいほどであったが、墓碑に彫られた鮑昌の詩に引きつけられた。「春の緑草は秋には枯れねばならないが、墳墓のあるところには必ず復活がある」。

以上のようなもの以外に、伝統的な遺骨処理法には、遺骨亭、遺骨塔、遺骨壁などもあり、このような方式ができてかなり時間が経つものの、利用する人はまだ多くない。

ここ数年、北京では新しい埋葬法を大いに推し進めているが、それは主に樹葬、海洋散骨などである。

樹葬とは、遺骨を直接大樹の根元に埋葬したり、遺骨を樹穴に撒いてからその上に植樹する方法である。一部の老革命家、例えば陳雲、聶榮臻、楊得志などは亡くなった後、率先して樹葬を採用した。海洋散骨とは、船で海に出てから遺骨を撒く処理法である。

市の埋葬管理処の職員が紹介して言った、「このような近代的な埋葬法は、人は自然から生まれ自然に帰る、という発展法則に適っている。一般の人たちは、遺骨処理が難しいとか、お参りをするのに精神的にも肉体的にも疲れるなどの問題を抱えてい

るが、それらが解決できるばかりでなく、国にとっても土地資源を大量に節約でき、国と国民のどちらにも利点がある」。

恐らく新聞界の宣伝報道が多いため、そしてまた周総理の遺骨も一部が海洋散骨されたためであろう、最近、海洋散骨という遺骨処理法を受け入れる人がますます多くなっている。公の海洋散骨は1994年に始まったが、初めのうちは、一部の知識人に受け入れられただけであった。第一回の海洋散骨には数十人分の遺骨しかなかったが、現在では毎回100人分を超える遺骨を処理している。海洋散骨はこれまでに順調に11回行われており、今回は9月に予定されている。

北京市の埋葬管理処の海洋散骨登記処で、二人の人が散骨登記の手続きをしていたが、学歴欄にはどちらも「大学」の二文字が書かれていた。

遺骨林という埋葬法は非常に特徴があり、その出現は比較的遅い。近代的埋葬の長所が少しあり、伝統的なものも少し残っている。

いわゆる遺骨林というのは、遺骨を防水骨箱の中に入れて森や芝生の中にびっしりと埋め、埋葬個所には一つ一つはっきりとした、非常に小さい標識を置くものである。この方法は、場所も取らず経済的で、遺骨も残り、各界の人たちに受け入れてもらいやすい。

北京の人々の百年後の行き先を見ると、遺骨を霊園に埋葬したい人がやはり大多数である。百貨大楼の宋女史は言う、「両親が落ち着いてはじめて私の生活も落ち着けるんです。この点では、私はちょっと迷信深いんです」。彼女が言ったことは、恐らく多くの人たちの考え方を代表しているであろう。しかし、私の知るところでは、一部の教養の高い人たちがこのような伝統的な方法を採用したがる理由は、故人との関係が親密すぎて、故人の遺骨を失うのに忍びないだけなのである。彼らもまた近代的な埋葬法の長所を目にしているが、他人に採用してもらいたいだけで、自分の事となると決心がつかないのである。

親戚或余悲，

他人亦已歌。

死又何所道，

托体同山阿。（陶淵明）

我々北京の人間が百年後どこにいて、落ち着き先をどうするにせよ、我々に陶淵明のような洒脱な態度があれば、どこに行っても、安らかに眠りにつくことができるのである。

6. おわりに

以上のように、アンケート調査のデータや農村での現地ヒアリングを通して、中国青年の死生観の一端を見てきたが、それは、過去の祭祀の背後にあった靈魂不滅の思想とは相容れないものである。北京の現状を紹介する文章は、ほとんど靈魂のことは触れていないが、その存在を肯定する場合には、「迷信深い」という遠慮した表現を使っている。過去における靈魂不滅の考え方が、現在ほとんど見られなくなったようであるが、なぜそうなったのか、今後も考えていきたい。

【参考文献】

大束貢生「日韓中データ国別大学生集計リスト」日韓中研究会1999/10/1レジュメ
呉魯平「中日韓三国青年生活観与社会意識比較課題 中国部分数据報告」1999年
河南省人民政府新聞弁公室編「新興的工業城市 新郷」新星出版社1998年
雷紹鋒，張俊超『漢族喪葬祭儀旧俗譚』武漢出版社1998年

